壁全体に広がるホワイトボードは筆談として使われるほか、客が書き込んだ店へのメッセージでいっぱい

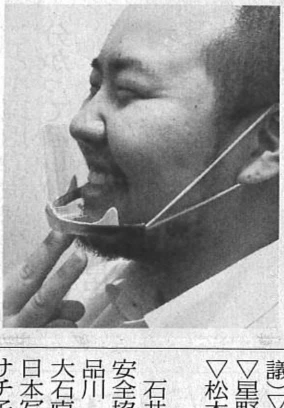
音の壁 越える壁

ホッ人 東京 2012 ぷれいす

「いらっしゃいませ」「ご注文は何にいたしますか」――多くの飲食店で飛び交う言葉が、この店では聞こえてこない。文京区本郷にあるカフェ「Sign With Me」では、スタッフ7人の多くが聴覚障害を持ち、客との会話には手話、筆談が必要。

自らも障害を持つ店長の柳匡裕さん(39)が昨年12月、「聴覚障害者がやりがいを感じる職場ができれば」と開店した。同じ障害を持つ人が訪れることが多く、店内で聴覚障害者向けの就職セミナーなども開催するが、柳さんは「手話になじみがない人にこそ来てほしい」と言う。

手話がわからなくても、店が用意した情報端末「iPad」を使って注文ができるようにした。壁全体に据え付けられたホワイトボードを使えば筆談でもOK。足を運ぶ人の8割は手話ができないが、来店をきっかけに「手話を覚えたい」という人も少なくないという。



口元が見える透明なマスク「マスクリア」をつけて店に出るスタッフ。手話者にとって、口の動きや顔の表情も大切な文法のひとつだ

手話は数ある「言語」のうちの一つ。特別なものという意識を取り払ってもらえればと、最近は店内スペースを使った勉強会も始まっている。手話を通じた交流が、少しずつ広がり始めている。

（写真と文、片岡航希）

【メモ】「Sign with Me」（文京区本郷5）のメニューはスープがメーン。「食べる」スープなど13種類の中から選べるほか、パスタ、オムライスなども提供している。店内のスペースを利用して活動するサークル「しかく広場」は、登録すれば誰でも手話を学ぶことが出来る。午前10時～午後8時。無休。詳細は同店のホームページ（http://signwithme.in）。問い合わせはメール（info@artn.jp）で。